

愛知大学研究助成

研究成果報告書 No. 23

2014

愛知大学

C-166	ジェイムズ・ジョイスにおける「変身」の研究 文学部准教授 小島 基洋 (2012年3月退職) 6
C-167	「エンターテインメント・サービスにおける“手がかり”の研究」 経営学部准教授 太田 幸治 7
C-168	災害救助エージェントシミュレーションにおける地図の定量化・分類と 救助戦略の関連性 経営学部教授 岩田 員典 8
C-169	Collect my materials about George Leonard stauton and her son George Thomas Staunton and the part they playd in the Macartney embassy to China 1792-1794 法学部教授 ジョン・ハミルトン 9

※研究代表者・分担者の所属・職名については、助成最終年度を対象とする。

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 共同研究
2. 助成番号 B-33
3. 研究課題名 <中国>をめぐるオリエンタリズム後の知の視覚化とイメージング研究
4. 研究代表者氏名 鈴木 規夫
5. 研究実績の概要 (800字程度)

本共同研究実績の最終成果として『イメージング・チャイナ—印象中国の政治学—』（国際書院 2014年3月）を、御蔭をもって上梓することができた。

『イメージング・チャイナ—印象中国の政治学—』は、鈴木規夫（研究代表）、周星、中尾充良、木島史雄の4名の共同研究者と、夏目晶子、徐青の2名の研究協力者とによる、序、跋も加えた全6章により構成され、まず、漢字文化圏において〈中国〉が想像されはじめてから、実は未だ一五〇年ほどであるに過ぎず、キタイ、ティナイ、シナ、チーン、から、もろこし……時代を重ねてそれはさまざまな変幻を繰り返してきており、その繰り返された変幻の総称としての〈中国〉はさらに再構築されつつある、という基本認識からはじまる。チンギス・ハーンが「中国人」になったり、「中国最大版図」がヨーロッパにまで達していたりする論議が登場してくるのは、〈中国〉という名辭のそうした性格をよく物語っており、〈中国〉はどこにもないにもかかわらず、すでに遥か昔から続いていた政治空間であるかのようなアイデンティティ指標としてもちいられることになり、〈中国〉はまさにそうした名辭として機能しようとしているのである。

〈中国〉が「想像の共同体」を構築するには、まず漢語が中国語になっていく過程が存在する。さらにそれは視覚的な共通感覚をも求めるようになるが、〈中国的なるもの〉を構成するものの多くは、さまざまな〈のようなもの〉の複合物であるに過ぎない。漢服や中山服があるからといって、それがすみやかに〈中国服〉になるわけではなく、また〈北京料理〉や〈広東料理〉がすなわち〈中国料理〉なのでない。国旗が主権国家のシンボルとなるように、姿形のあるものがある特定のイメージを構築するには、そこに一定の想像力が必要とされ、そうした想像力がさらに共有されていく必要もある（本書第一章、第二章参照）。〈中国的なるもの〉のイメージは自己により探究されるものであるばかりでなく、逆に他者により構築されているという点も重要である。オリエンタリズムのような他者表象は支配と被支配との力学的関係の基層を形作るが、〈中国的なるもの〉のイメージがどこでどのように消費されるのかに応じて、その力関係への認識は異なってくるであろう（本書第三章、第四章、第五章参照）。さらに言えば、〈中国的なるもの〉がグローバルな政治的意味をどのように配置されるのかに応じて、今後の世界の様相は確実に変化するともいえるのである（本書第六章参照）。

本書は、本共同研究実施成果として、そうした〈中国〉をめぐるイメージの生成と消費のさまざまなレベルでの動向を探る一つの試みを提示するものに他ならない。

6. 研究発表

書 籍	巻 号	発表年月(西暦)
イメージング・チャイナ—印象中国の政治学—	国際書院	2014年3月

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 共同研究 B
 2. 助成番号 B-34
 3. 研究課題名 中部地域企業の中国展開と現地化
 4. 研究代表者氏名 阿部 聖
 5. 研究実績の概要 (800 字程度)

本研究は、中部地域企業、とりわけ東海地域に本拠を置く自動車関連企業の海外展開の現状や、現地企業をとりまく環境変化とそれへの対応について、これまで日系企業の課題とされてきた現地化とのかかわりの中で、中国を中心とする現地進出企業の現地調査及びインタビュー等により、他のアジア諸国との比較や相互関係といった視点を取り入れつつ明らかにすることを目的として行われた。

このため、3 年間にわたり中国上海地区、(①刈鋌車件製造、②豊田紡織 (中国)、③昆山豊田紡汽車部件、④上海安凱希斯汽配)、台湾 (①協祥機械工業、②春翔欣業、③慧国工業)、中国天津地区 (①天津豊鉄汽車部件、②天津電装電子・電装(天津)汽車導航系統、③天津一汽豊田汽車)、ベトナム (①イノウエラバー・ベトナム、②エフ・シー・シー・ベトナム、③ホンダ・モーター・ベトナム)、中国広州地区 (①高丘六和 [広州] 機械工業、②阿斯莫 [広州] 微電機、③光洋六和佛山汽車部件)、インドネシア調査 (①P.T. アイシン・インドネシア、②P.T. トヨタ・モーター・マニユファクチャリング・インドネシア、③P.T. デンソー・インドネシア) の各国、地域および企業等を訪問し、工場を見学して、インタビューを行った。

この他にも、現地の JETRO や商工クラブを訪問して、現地の経済状況や日系企業の活動についてもインタビューするとともに、現地の工業団地や開発区、商業・観光施設も時間の許す限り見学した。

輸送機器をはじめとする主要組み立てメーカーのグローバル生産体制の構築が進む中で、部品・素材メーカーも生き残りをかけて国内外での提携・再編・統合を進めつつ、グローバルな供給体制を構築する必要に迫られている。また、日本からの海外進出企業は、現地企業の追い上げ、物価・賃金の上昇、地方政府を含む各国政府による優遇措置の廃止などの他、金融危機など世界的規模の経済環境の変化に対して、どのように対応していくかも問題となる。

こうした中で、従来から欧米企業に比べて遅れていると指摘されてきた、現地企業の経営戦略、生産体制、研究開発、人材確保・人材育成などの現地化をどのようにクリアーしていくのか、あるいは日本流現地化といったものをあくまで徹底していくのかは興味深い問題と言えよう。そして、こうした問題の解決は、今後の海外へ進出した日系企業の動向を左右する重要な点と考えられる。

本報告書は、訪問した地区や国ごとに自動車関連企業の調査および自動車産業の動向を概要として述べ、訪問した企業ごとに海外展開の背景、現地化の様子についてまとめた。最後に中国自動車社会の現状と課題について整理するかたちをとった。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
中部地域企業の中国展開と現地化調査報告書 —自動車関連産業を中心として—	愛大中産研研究報告 第 67 号	2014. 3. 31

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 共同研究 B
2. 助成番号 B-35
3. 研究課題名 民衆工芸の理論と歴史に関する国際比較
4. 研究代表者氏名 河野 眞
5. 研究実績の概要 (800字程度)

平成 21 年度愛知大学研究助成 (共同研究 B) の枠組みとして、2009～2011 年度と報告書作成機関の 2 年を加えた 2013 年度まで、主に次のテーマについて研究を行なった。

①民藝(Volkskunst / folk art)の概念とその学説の変遷の把握

この方面の学説史はヨーロッパ諸国では厚いが、日本には全く未紹介という事情と、美術史・民俗学・エスノロジーの接点であるために概観に手間取ったが、研究機関とその報告書までの整理の期間によって、ようやく輪郭をつかむことができた。特にドイツ語圏を対象に行なったことから、19 世紀末以来の美術史系の見解と 20 世紀の 20 年代から本格化する民俗学系の見解を二つの焦点とする楕円として理論分布の構図をつかむことができた。その理解を完全には公表するにはいたっていないが、報告書にはその輪郭を呈示することができた。その成果は、報告書とは別に、一兩年のあいだに書物の形態で実現する運びである。

②ヨーロッパの数カ国について、民藝関係の博物館の実態の把握

民藝の観点からヨーロッパ諸国の博物館の実態に注目することは、これまでほとんどなされていなかったが、研究期間とその後の留保期間の間に、ドイツ語圏をはじめラテン諸国、北欧など、ほぼ 7 カ国 80 か所近い博物館・資料館を訪ねることができた。そのなかには、日本人が訪ねたことがない地方の資料館や特定テーマによる資料館も含まれる。また地方の博物館の運営形態について実地に調査をおこない、日本とはことなつた地域社会のシステムを親しくふれることになった。この成果も、さらに補足を加えた後に、一兩年内に書物として公刊することを計画している。

③民藝と密接な伝統行事から特にファスナハト行事を選び、数か所を実地調査。

この項目では、特に日本であまり紹介されていない事例に焦点を当てた。具体的には、ドイツのバーデン＝ヴュルテムベルク州ロットヴァイル、ヘッセン州ヘルプシュタインである。またその過程では、この分野の研究では際立った方法論をもつテュービンゲン大学のルートヴィヒ・ウーラント経験型文化研究所と連絡を取り、また訪問を重ねた。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
『民具陳列室ニュース』「針入れ」, 「マトリョーシカ」, 「コーヒーミル」	第7号,第8号, 第9号	2010, 2011,2014
翻訳・シャルフェ「民俗学が読んだヴィネット」『言語と文化』	第29号	2013
翻訳・デネケ「民藝の発見と工芸産業」『言語と文化』	第30号	2013
翻訳・リーグル「民藝・家内作業・間屋制家内工業」『文明 21』	第32号	2014

研究成果報告書記載用

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 共同研究 B
2. 助成番号 B-39
3. 研究課題名 地域のメンタルヘルスケアの実態調査と改善方法の総合的研究：東三河を中心として
4. 研究代表者氏名 浅野俊夫
5. 研究実績の概要（800字程度）

愛知大学の心理学専攻に所属する各専門領域の研究者が協同して大学の所在地である東三河地域のメンタルヘルスおよびケアの実態を明らかにし、教育分野・産業分野・高齢者分野について大学リソースの有効利用も含めて各分野の地域メンタルヘルスケアの改善方法を確立することを目的として、本共同研究が開始された。地域のメンタルヘルスケアは職場・学校・施設・家庭それぞれが密接に関連しているが、本研究では、臨床心理学の木之下（臨床心理士）が学校の生徒や教員のメンタルヘルスを中心として教育分野を分担し、健康心理学の樋口（豊橋校舎学生相談室長）が企業労働者のメンタルヘルスを中心とする産業分野を分担し、発達心理学の鎌倉（臨床心理士）が高齢者やその介護に関わる者のメンタルヘルスを中心とする高齢者分野を分担し、浅野、井藤、吉岡が各分野の補助とまとめをするという形で、共同研究を推進した。

教育分野では2010年の文部科学省の調査で学校教員の精神疾患による休職者が年々増加しているという中間報告があったので、東三河の小中学校の教職員のメンタルヘルスの実態を把握するための調査を開始した。メンタルヘルスの実態把握には個人の壁、学校の壁、教育委員会の壁と多くの困難があったが、豊橋市教育委員会の協力を得て、小・中学校の教師220名の調査が完了して、その結果を「東三河（教育分野）からの調査結果報告とメンタルヘルスケア対策」として冊子にまとめ、教育委員会の初任者研修やメンタルヘルス研修におけるテキストとして配布し木之下が説明を行った。その後も教育委員会の研修等での講演や個別相談を続けた。また、新たに医療・保健領域での地域連携を目指し、保健所の協力を得て、市民のこころの健康相談の実態を把握するための調査を行った。その結果は、論文「こころの健康相談：相談者の状況と分析 医療・保健分野からの報告」にまとめ、研究報告書に掲載した。

産業分野では、愛知県の産業労働課から平成24年度のワーク・ライフ・バランス推進セミナーのコーディネートの依頼があった。本研究の主旨と合致し、担当官庁や地元企業との交流をはかる良い機会と思われたので、代表者の浅野がコーディネーターをつとめ、木之下・樋口が講演したあと、県下の企業の産業カウンセラー等8名でパネルディスカッションを行い、愛知大学心理学研究室の活動を周知することができた。産業分野での調査報告は論文「労働とメンタルヘルスに関する調査報告」として研究報告書に掲載した。

高齢者分野では、大学生と介護施設従事者を中心に調査を行ったが、その結果は論文「高齢者介護施設従事者の高齢者への関わり方と大学生が抱く高齢者観の諸相に関する調査研究」として研究報告に掲載した。

また、平成25年度には、豊橋市教育委員会から生涯学習講座講師の依頼があり、本共同研究の結果や心理学の知見を市民に伝える良い機会であると思われたので、市民大学トラム「愛知大学連携講座 家庭における心の健康」を豊橋校舎で開催し、浅野・樋口・木之下・鎌倉・吉岡が講師を務めた。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
木之下隆夫「東三河（教育分野）からの調査結果報告とメンタルヘルスケア対策」	研究報告（冊子）	2012.9
浅野・樋口・木之下・鎌倉・井藤・吉岡「地域のメンタルヘルスケアの実態調査と改善方法の総合的研究：東三河を中心として」	愛大中産研研究報告 第68号	2014.4

研究成果報告書記載用

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 個人研究 A
2. 助成番号 C-164
3. 研究課題名 世代別労働市場とその地域間比較に関する分析
4. 研究代表者氏名 杉浦 裕晃
5. 研究実績の概要 (800 字程度)

研究実績として、世代別労働市場の地域間比較に関して進展が見られた。世代別労働市場の中でも若年層の労働市場および地域間労働移動に関して、「就業構造基本調査」を用いた分析が、弘前大学人文学部教員との共同研究として進められている。この研究成果は 2012 年度において、ミネルヴァ書房から『「東京」に出る若者たち』として出版された。筆者担当箇所は第 1 章および第 3 章であるが、刊行年度が助成年度から外れたことや別途の科研費の研究分担者であったために、謝辞に愛知大学研究助成の明記がなされなかった点を深くお詫びしたい。

愛知県の「労働市場年報」のデータを用いた分析については、データの制約上、世代別労働市場の分析は十分進まなかったが、東三河地域の産業別労働市場の分析については大きな進展が見られた。特に「労働市場年報」と「経済センサス」のデータを組み合わせる研究は画期的で、その成果は愛知大学経済学部「経済論集」および愛知大学中部地方産業研究所「東三河の経済と社会」第 7 輯で発表している。

青森県の「労働市場年報」のデータを用いた分析については、東日本大震災に伴う交通網の混乱および救助支援を優先する立場から、青森への移動を長期にわたり自粛したため、データの収集に終わっている。その後データの分析を試みたが、ハローワークの管轄地域と経済センサスの地域区分が合致しないことが判明し、研究は十分進展しなかった。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
愛知大学経済学会「経済論集」	第 187 号	2011 年 12 月
愛知大学中部地方産業研究所「東三河の経済と社会」第 7 輯		2012 年 3 月

研究成果報告書記載用

1. 研究種目 個人研究 B
2. 助成番号 C-166
3. 研究課題名 ジェイムズ・ジョイスにおける「変身」の研究
4. 研究代表者氏名 小島 基洋
5. 研究実績の概要 (800 字程度)

ジョイス作品における「変身」をテーマに研究を行い、デビュー作『ダブリン市民』から、最終作品『フィネガンズ・ウェイク』の読み直しを図るとともに、特に彼の初期作品における「変身」のテーマを探究した。

その過程で明らかになったのは、彼の長編小説『若き芸術家の肖像』(A Portrait of the Artist as a Young Man) 中における「変身」である。以下に本小説の主人公が作中で創作した詩を引用しつつ、具体的な研究成果を示す。

*The ivy whines upon the wall,
And whines and twines upon the wall,
The ivy whines upon the wall,
The yellow ivy upon the wall,
Ivy, ivy up the wall.*

引用中に蔦が「忍び泣く」(whines)という奇妙な表現があるのだが、この単語が登場した背景には、「葡萄酒」(wine)が存在しているのだと推察される。wine が whine へと変化を遂げているのだとすれば、ここにジョイス文学の大きなモチーフである聖体拝領の儀式を見出すことが可能である。ワインをキリストの肉体に変えるカトリックの秘儀を文学的に転用すること—これがジョイスの初期作品における「変身」の一例である。

私は本論考を基に京大英文学会年次大会(平成24年11月10日(土)於:京都大学)で口頭発表を行った。題名は「ジェイムズ・ジョイスと聖体拝領—『若き芸術家の肖像』を中心に」である。この口頭発表を「マスカット葡萄の拒絶・忍び泣く葡萄酒—『若き芸術家の肖像』におけるスティーヴンの芸術的聖体拝領」というタイトルで論文化したものが、京大英文学会が刊行する *Albion* 復刊 59 号に掲載された。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
「マスカット葡萄の拒絶・忍び泣く葡萄酒—『若き芸術家の肖像』におけるスティーヴンの芸術的聖体拝領」48-59 頁 <i>Albion</i> 京大英文学会	復刊 59 号	2013 年 11 月

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 個人研究B
2. 助成番号 C-167
3. 研究課題名 「エンターテイメント・サービスにおける“手がかり”の研究」
4. 研究代表者氏名 太田 幸治
5. 研究実績の概要 (800字程度)

従来のサービス研究では、当該サービスの本質、すなわち内在的手がかりを消費者に訴求することは困難であるとされてきた。そして消費者が当該サービスの本質よりもむしろ当該サービスが提供される場所や施設といった物理的な属性、または当該サービスとは直接結びつかない価格やイメージといった外在的な手がかりを頼りに購買意思決定しているとされてきた。本研究では、エンターテイメント・サービスのマーケティングを検討する際、さしあたり、サービス・マーケティングの既存研究と従来のマーケティングと照らし合わせながら検討した。従来のマーケティングで重視されるのは、当該製品のコンセプトである。基本的には消費者自身は自分の欲しいものはわからない。ゆえに、マーケティング主体は消費者にニーズを聞くのではなく、消費者が感じるであろう便益を当該製品に込め、市場に提供することが求められる。消費者の感じるであろう便益を売り手の言葉で表したものを従来のマーケティング研究ではコンセプトと呼んでいる。そしてコンセプトを市場に訴求することがマーケティングの中核であるとされている。先に示したようにサービスの場合、消費者は内在的手がかりを軽視する。サービス・マーケティングのテキストをみても、サービスの本質的な価値は差別化しにくいとされ、本質的サービスをより魅力的なものとする補完的なサービスで他社との差別化を図るべきであるという論調が主流である。本研究では、消費者が当該サービスの本質的な価値を理解できないからといって、すぐに補完的サービスでの差別化で競合他社との競争に挑もうとすることは、従来のマーケティングの思想からしておかしいという立場に立ち、理論的な整理を行なった。

文献調査のほかに、本研究では売り手、買い手にヒヤリングを行ない、エンターテイメント・サービスの「手がかり」が売り手と買い手の双方にどのように捉えられているか調査した。かかる調査で明らかになったことは、売り手側は当該サービスのコンセプトを明確に理解している場合と、理解していない場合があることである。サービスを直接提供する主体は、コンセプトを理解しているが、当該製品のマーケティングに係わる主体は理解していない場合があった。一方、買い手の場合は、コンセプトをそこまで理解していないことが多い。例えばスポーツの消費者で大会で好成績を残しているような選手であっても、当該製品の本質的な価値を明確に言語化できないことが複数見受けられた。本研究では、ヒヤリングで問題の構造化を行なった。今後は、より問題の構造化を進め、定量的な調査を行なう必要がある。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
「サービス・コンセプトとサービスの構成要素の関連性に関する一考察」、『経営総合科学』(愛知大学経営総合科学研究所)	101号	2014年2月

研究成果報告書記載用

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 個人研究 A
2. 助成番号 C-168
3. 研究課題名 災害救助エージェントシミュレーションにおける地図の定量化・分類と救助戦略の関連性
4. 研究代表者氏名 岩田 員典
5. 研究実績の概要 (800 字程度)

本研究では大きく分けて二つの事項について取り組んだ。一つ目は様々な環境で動作するエージェントを評価するために、問題となる環境とエージェントの振る舞いとの関係性を分析した。二つ目は、大規模災害時における避難経路等の探索において、最短経路が閉塞する可能性を考慮したなるべく安全な経路を探索する方法を提案した。

一つ目に関して、これまでに我々は、地図上の道路の構造と建物配置に注目し、問題となる環境(地図)を定量化する方法を提案してきた。その定量化では地図をネットワークと見なしネットワーク理論の様々な手法により解析をしてきた。また、建物の配置に関しては社会工学の理論を応用して定量化してきた。そして、これらの手法を用いて異なる環境で振舞うエージェントの行動を評価する可能性について検討していた。本研究では、これまでの研究成果をもとに、地図上の道路ネットワークの構造と建物配置の情報をより表現できる手法を提案した。そのために、地図を画像として捉え、構造的な特徴を抽出する方法を考察した。考察にあたり様々な地図及びエージェントを用いて、その関係性の分析を行った。そして、その結果が従来よりも明確に地図とエージェントの振る舞いの関係性を導き出していることを示した。

二つ目に関しては、従来の最短経路探索法 (A*アルゴリズム) では地震などの大規模災害が起こった場合に、その経路が通行不能になり、迂回路を使うと目的地 (避難先) に到達するのに時間がかかってしまうという問題があった。そこで、最短経路のふさがる確率を考慮して、迂回路と最短経路のうち予測されるコストが少なくなる方法を提案した。そして、提案した手法の有効性を確認するために、マルチエージェントシミュレーションを行い、様々な条件を変えて評価実験を行った。その実験結果から、先行して調査するエージェントがいて情報供給でき、かつ最短経路が利用できる (閉塞しない) 場合は、従来の最短経路探索が短時間で移動できるが、それらの条件が少しでも崩れた場合は提案手法が有効であることが示せた。また、条件がそろっていても提案手法は従来の最短経路探索から大きく劣るわけではないことも示せた。したがって、様々な条件を考えると提案手法は従来の最短経路探索よりも安定してよい結果 (短時間での避難) を行えることを示せた。

6. 研究発表

学 会 誌 名	巻 号	発表年月(西暦)
人工知能学会「社会における AI」研究会 第 15 回研究会 「画像による地図の複雑さによるマルチエージェントシミュレーションの評価に関する一考察」	2012-01	2012 年 11 月
人工知能学会「社会における AI」研究会 第 15 回研究会 「災害時の経路探索手法に関する一考察」	2013-01	2013 年 3 月
経営総合科学「確率的な交通障害発生におけるマルチエージェントの経路探索手法」	第 100 号	2013 年 10 月

研 究 成 果 報 告 書

1. 研究種目 個人研究 A
2. 助成番号 C-169
3. 研究課題名 Collect my materials about George Leonard stauton and her son George Thomas Staunton and the part they playd in the Macartney embassy to china 1792-1794
4. 研究代表者氏名 John Hamilton
5. 研究実績の概要 (800 字程度)

This research has been about George Leonard Staunton who wrote the famous account of the Macartney embassy to China. There is a copy of this book (2 volumes and a volume of maps and illustrations, published in 1798) in Aidai's library in Toyohashi.

The research is also about his son George Thomas Staunton who aged 11 accompanied the embassy, studied Chinese on the boat from the interpreters, and knelt before Emperor Qianlong in Jehol, now Chengde 承德. Later he continued to study Chinese and found a job in the East India Company in Canton 广州。 Here, besides his work sending tea to England, he translated a book of Chinese law into English, and a medical article from English into Chinese. In 1820 GTS retired to England and bought the Leigh Park estate in Hampshire. There he made a Chinese garden and built greenhouses which he filled with exotic plants, many of them collected by plant hunters in China.

Thanks to the help from Aichi University, I have been able to visit Chengde and Beijing, and also Hong Kong. In England the people at the Staunton Country Park, which used to be his Leigh Park estate, helped me a lot. I also visited the Royal Asiatic Society in London and Leeds University in Yorkshire where his books are to be found. Professor Han Qi of the Chinese Academy of Sciences, who was introduced to me by Kuzuya sensei of Aidai, has also helped me a lot. I did some further research on STAUNTONIA HEXAPHYLLA (Mube 郁子 in Japanese). The whole subject is a big one, but thanks to this funding, I feel I have made a good start.

6. 研究発表

学 会 誌 名	卷 号	発表年月(西暦)
一般教育論集	第 46 号	2014 年 3 月

未掲載分は C-163 です。

2014

愛知大学研究助成 研究成果報告書

2014年10月 発行
発行 愛 知 大 学
